

## 形容詞的用法の「動詞+た」形連体節についての一考察

趙, 海城  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494621>

---

出版情報：比較社会文化研究. 18, pp.31-43, 2005-08-10. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：

# 形容詞的用法の「動詞+た」形連体節についての一考察<sup>1</sup>

チョウ  
趙

カイ ジョウ  
海 城

## 1. はじめに

現代日本語においては「生きた日本語」「帽子をかぶった男」「茹でて野菜」のように「動詞+た」形で被修飾名詞の属性を表す形容詞的用法がある。連体節<sup>2</sup>の動詞述語の特徴、共起成分によって、「動詞+た」形が形容詞的に解釈できたり、できなかつたりするため、この用法は日本語学習者にとって理解しにくく、なかなか使いこなせない項目の一つであると言われている。「生きている日本語」「帽子をかぶっている男」「茹でてある野菜」と表現しても一応通じるので、教育現場でもわざわざ取り上げて教育することが少ないようである<sup>3</sup>。しかし、日本語らしい表現を身につけ、表現の豊かさを求めるためには、この「ている」「てある」の交替形としての「た」も学習項目として取り上げて、中級後半か上級レベルの学習者に教育するのが望ましいと思われる。その前段階として、このような連体節「動詞+た」がどういった意味特徴を示し、どのような構文的特徴を持って、どの程度の広がりを見せているかを整理しておく必要がある。

本稿はこのような連体節「動詞+た」形の形容詞的用法について、実際の用例の観察に基づき、この用法が現れるにはどのような動詞、いかなる構文的条件が必要かを考察するものである。

## 2. 先行研究と問題点

### 2.1 先行研究の概観

連体節「動詞+た」の形容詞的用法については、以前から指摘されている。例えば、以下のような記述がある。

松村(1969:152-153 田中章夫執筆)では、属性所有を

表す「た」の例として、「冷えたビール」「焼けた魚」「冷やした牛乳」「焼いた魚」などを挙げ、本来属性の意味を持たない動詞でも、連体節内において属性・状態の意味を示すことがあると指摘され、「た」は「冷え、焼け」ている」「(冷やし、焼い)てある」に置き換えられると記述されている。

最近の研究では、寺村(1984:137-144;199)、揚妻(1994)、金水(1994)、稲垣(1998)などがある。そのほか、高橋(1994)では連体節動詞の現在形、過去形の用法が網羅的に記述されている。影山(1996)では英語の形容詞的「~ed」と対照しながら、日本語の形容詞的用法の「た」について述べられている。

以下、寺村(1984:137-144;199)、揚妻(1994)、金水(1994)、影山(1996)、稲垣(1998)などの研究を概観する。

寺村(1984:137-144)では、動詞の~テイルにはアスペクトを表す用法と形容詞的な用法があるとしている。~テイルの形容詞的な用法とは、主体のある様子を、時間的な局面変化ではなく、他と比較して特徴づけたものであると述べている。

また、~テイルの用法が形容詞的用法であると見るには、以下の二つの条件を満たす必要があると述べている。

- ① ~テイル形と平行して、(未来・未然の)基本形の用法、(過去・已然の)過去形の用法が考えられないこと
- ② 連体修飾で普通~タの形になり、しかもその~タ形には已然(完了)の意味も、過去の意味も感じられないこと

そして、上の二つの条件を満たすかどうかを基準にし、動詞を次の三種類に分けている。

- A ~テイルがいつも形容詞的になる動詞(優れている/ばかっている)
- B ~テイルがいつもアスペクト的(已然の結果)になる

1 金田一(1950)によれば「第四種動詞」とされた動詞は形容詞的であって、動詞そのものが状態性を持っており、連体節述語として機能する場合は「ている」形で現れることもあるが、通常「た」形で使われる。本稿では、このような語彙的意味に「形容詞性」のある動詞を考察対象外とする。

2 連体節は「連体修飾節」「名詞修飾節」といった呼び方があるが、本稿では「連体節」を用いる。また、連体節によって修飾される名詞は「被修飾名詞」「底の名詞」「主名詞」といった名称があるが、本稿では「被修飾名詞」を用いる。

3 砂川(1986:81-82)では、【①形容詞的動詞の過去形+名詞、②関係や存在を表す動詞の現在形/過去形+名詞、③結果として存在する状態+ている/てある/た+名詞】を学習項目とした説明と練習がある。連体節の「ている/てある」と「た」の対応関係を解説した日本語学習参考書の中で最も詳しいとされている。他のテキストでは当該項目を取り上げていないか、もしくはよく使われる表現「太った、痩せた」などが語彙項目として提示されている。

動詞（食べている 飲んでいる）

C 文脈次第で、～テイルが形容詞的にもなるし、アスペクト的にもなる動詞（着物を着ている 変わっている）

多くの動詞がC類に入り、文脈によって、既然の結果（継続か完了の結果）のアスペクト的用法を示したり、形容詞的用法を示したりする。

さらに、寺村(同上：199)では、下の例(1)を挙げて、(1) bのように主格を表す名詞(その婦人)が被修飾名詞N(着物)と別に存在している時、～タ形は既然のアスペクトを、～テイル形は継続・状態(既然の結果の存在)を表すとし、それに対し、(1) aのように被修飾名詞N(婦人)が意味的に～タ/～テイルの主格に立つとき、～テイルも～タも状態の意味になり、～タが形容詞に近づいているとしている。つまり、連体節内に主格が現れる場合、連体節の～タ形が形容詞的用法としては解釈しにくくなるのである。

(1) a 白っぽい着物を {着た (=着ている)} 婦人が入ってきた。

b その婦人が {着た (≠着ている)} 着物には見覚えがあった。

寺村(1984)は「文脈次第で、～テイルが形容詞的にもなるし、アスペクト的にもなる動詞」が存在することを指摘してはいるものの、具体的にどのような動詞、どのような構文的条件のもとで形容詞的解釈が可能か、あるいは不可能かについては考察していない。

揚妻(1994)では、連体節における動詞の「た」が状態・属性を表すかどうかは「た」を「ている(てある)」に言い換えられるかどうかという基準で判断され、当の基準に合うものが状態・属性を表していると見る。考察した結果、状態や属性を表す動詞の語義的性質として以下の4点を挙げている。

- ・人やものの性質を表す(すぐれる、そびえる)
- ・他との関係を表す(値する、関連する)
- ・自らが変化する(太る、汚れる)
- ・対象に変化を与える(主体自身を変化させる：着る、かぶる、対象を変化させる：つぶす、炒める、染める)

また、構文的特徴として、以下の条件下で連体節の「た」が属性化すると述べている。

- ・結果副詞を伴う(赤く染めた布、ドロドロに溶けたチョコレート)

・材料・方法を示す成分を伴う(砂で書いたラブレター、粘土で作った灰皿)

・反復を示す成分を伴う(月々決まった額の小遣い)

さらに、動作性のある動詞が連体節において状態・属性と解釈されるのは発話者の視点によるとしている。発話者がその動作の変化のプロセスや完了した時点を意識しなければ、視点は対象にすでに備わっている属性のみにあり、「た」はテンスから開放されるとしている。

揚妻の論述は大変示唆に富んでいるが、連体節の「動詞+た」の形容詞化する条件として挙げた結果副詞に具体的などのようなものがあるかについては詳しく考察されていない。また、連体節における動詞の「た」形が状態・属性を表すかどうかの基準を一律に装定用法で「ている(てある)」に言い換えられるかどうかには疑問を感じる。例えば、例(2)(3)は装定のままでは「ている(てある)」に言い換えられないか、もしくは言い換えても甚だ不自然になると感じられる。

(2) 『コンスタンティノープルの陥落』(1455)：ヴェネツィア居留区の主だった人々の間では、この程度の戦力であろうと察しはついていたからである。⇒\*主だっている人々

(3) 『山本五十六』(5571)：それはその秋、徳山沖に入港中の艦隊から列車で上京の折、山本と藤田を乗せて三田尻駅へ向う自動車がちょっとした事故を起した時のことである。⇒\*ちょっとしたしている事故

金水(1994)では形容詞的意味を持っていて、連体修飾では「～タ」、述定では「～テイル」または「～テアル」で現れる述語を、「～タ」、「～テイル」、「～テアル」を含めた形で「形状動詞」<sup>4</sup>と名付けている。この形状動詞を「構造的形状動詞」と「語彙的形狀動詞」に分けて詳しく分析している。

構造的形状動詞は動詞の概念構造のうち、結果の状態を焦点化することによって派生されると述べている。この結果状態の焦点化は動詞全体の状態化、外項(動作主、主語)の抑制などの効果を引き起こすとしている。つまり、連体節の～タが形容詞的意味を持つのは結果状態が焦点化——主語、動作主などの外項の抑制——することによるという考えである。裏返して言えば、主語、動作主などが抑制されず、文面上に出れば、連体節の～タは形容詞的用法だと解釈しにくくなり、時制<sup>5</sup>の「タ」に解釈されやすいこ

4 金水は寺村(1978)の用語を借りているが、金水の「形状動詞」の範囲は寺村(1978)に用いられている同語の範囲より広い。このことは寺村(1978)で「先のとがったナイフ、曲がりくねった山道」などの例を挙げて、「このような『～した(名詞)』は『眼鏡をかけた人』『着物を着た婦人』などのように、本来形状動詞とは言い難い動詞にも拡大して使われる」と述べられていることから窺い知ることができる。したがって、寺村(1978)における「形状動詞」は、ほぼ金水用語の語彙的形狀動詞に当たると理解できる。

5 金水は過去、既然、完了などの用法の総称としている。

となる。この考えは寺村(1984:199)のC類動詞(文脈次第で、～テイルが形容詞的にもなるし、アスペクト的にもなる動詞)についての叙述とほぼ一致していると思われる。

影山(1996)は金水(1994)と同様、連体節「動詞＋た」が形容詞的に解釈できるのは「結果状態の焦点化」によるとしている。影山(同上:103-105)では形容詞的用法の連体節「動詞＋た」の示している状態は、もともと被修飾名詞に備わった状態ではなく、何らかの動作・変化が行われた後に生じた変化結果の状態であると指摘し、連体節「動詞＋た」と状態形容詞の違いを挙げて説明している<sup>6</sup>。

青い顔／青ざめた顔、汚い下着／汚れた下着、多くの不満／溜まった不満  
 状態形容詞の概念構造：[y BE AT-z]  
 形容詞的用法の連体節動詞「動詞＋た」の概念構造：  
 [BECOME [y BE AT-z]]

状態形容詞は単なる現在の状態を表すのに対し、連体節動詞「V＋た」は何らかの動きを背景にした結果状態を意味するというのである。両者の概念構造を比較してみると、状態形容詞は単なる状態[y BE AT-z]を表すのに対して、形容詞的用法の連体節「動詞＋た」はある動作変化[BECOME]があって、その変化の結果[y BE AT-z]状態になるのである。この結果状態に焦点が当たり、状態に至るまでの動作変化が背景化されることによって形容詞的解釈ができる。この分析を踏まえて、影山は、連体節で形容詞の意味に解釈できる動詞は状態変化[BECOME]を持つ動詞でなければならないと結論付けている。

稲垣(1998)も金水(1994前掲)の「結果の状態の焦点化」を受け、「動作主が存在が意識されないある動きを背景にした変化結果の状態を表し、時間性から離れていて、非時制的である」という意味を「形容詞的」と呼び、その変化結果の状態を一時的状態として、被修飾語の属性と解釈している。

ただし、稲垣(1998)は形容詞的に解釈されうる動詞は変化動詞であると明らかにしたものの、どのような条件のもとで連体節「動詞＋た」が形容詞的に解釈されるか、またどのような条件は動詞の形容詞的解釈を阻害するかについてほとんど触れていない。

以上、連体節「動詞＋た」の形容詞的用法に関する先行研究を概観してきた。まとめると以下のものである。

- ・連体節「動詞＋た」形には過去・完了を表すテンス的

意味、被修飾名詞の属性状態を表す形容詞的用法がある。

- ・連体節「動詞＋た」形で形容詞的用法を持つ動詞は一部の変化動詞に限られている。
- ・結果状態の焦点化、出来事の背景化によって形容詞的解釈が可能になる。

## 2.2 先行研究の問題点

先行研究に見られる問題点、不十分と思われる点は次のようにまとめられると思う。

① 主語の有無は連体節「動詞＋た」形の形容詞的解釈を決める絶対基準とはならない。

寺村(1984)、金水(1994)は文中に主語、動作主が現れる場合、連体節の「動詞＋た」形は形容詞的用法として解釈しにくくなると主張しているが、例(4)(5)から分かるように、主語、動作主が現れても、形容詞的用法だと解釈できるものがある。したがって、動作主、主語の有無を基準に、直ちに形容詞的解釈ができるかどうかを決めることはできない。

(4)『野火』(1266)：樹皮のはげた幹の下面には苔がついていた。

(5)悪漢の乗った自動車は踊りながら崖っぷちを疾走している。(楡家のひとびと)

② 連体節「動詞＋た」の形容詞的解釈を左右する副詞的修飾語の実態がはっきりしていない。

金水(1994:52)では「動詞を修飾する副詞(相当語句)が結果の状態に強く関与していればいるほど、形容詞的解釈は容易になる」としている。また、揚妻(1994)でも連体節「動詞＋た」形が形容詞的解釈のできる条件として結果副詞を挙げている。しかし、連体節の「た」形の形容詞的解釈を容易にする副詞、別段容易にするわけではないが共起可能な副詞にはどのようなものがあるか、具体例の分析を通して考察する必要がある。

③ 具体的にどういった文脈、構文的条件のもとで、形容詞的解釈が可能か、あるいは不可能になるかについての説明はまだ不十分である。

日本人は母語感覚を持って、この連体節「動詞＋た」の意味を正しくとらえることができると思われる。しかし、外国人日本語学習者にとっては、どういった要素がこの連体節「動詞＋た」の意味変容に関わっているかをはっきりさせることが大切であろう。

6 影山(1996:105)では、「ばかな話／ばかげた話、古い教会／古びた教会」などの例も挙げられているが、本稿では右側の「ばかげた、古びた」などの動詞には変化がほとんど見られないと考え、第四種動詞として本稿の考察対象外とする。なお、影山は形容詞的用法の連体節動詞の「た」形を「完了形容詞」と名づけている。

### 2.3 本研究の目的

先行研究の諸問題点を踏まえて、本研究は連体節「動詞＋た」形が形容詞の意味に解釈されるには、主語、副詞的修飾語、他の連用成分がどのように関わっているか、どのような成分によって形容詞的解釈が阻害され、「た」がテンス(過去、已然、完了)しか表さなくなるかを明らかにすることを目的とする。

## 3. 基本概念とデータ収集

### 3.1 基本概念

#### 3.1.1 連体節

日本語の連体修飾表現は述語以外の語句による修飾と述語による修飾の2種類に大別できる。本稿は動詞(句)による修飾を対象に分析する。なお、本稿では動詞単独で、あるいは補足成分や修飾成分を伴って名詞を修飾する表現を連体節と呼ぶ。連体節と被修飾名詞との関係は構造的、意味的な観点から、「内の関係」「外の関係」<sup>7)</sup>に分けられるが、本稿では「内の関係」の連体節を考察対象とする。

被修飾名詞の属性状態を表す連体節「動詞＋た」を考察対象としているので、被修飾名詞が実質名詞であるものに限定し、接続助詞化した「こと、もの、あとで、とおり、とき」など、助動詞化した「はずだ、わけだ、ようだ」などは対象外とした。なお、原則的に連体修飾動詞の「た」形の直後に名詞が来るものを連体節とし、「た」と名詞の間に「という、との、ような」が入ったものは採集対象外とした。しかし、「賛沢は敵だと印刷した新しいポスター」など連体修飾動詞と被修飾名詞のつながりが強いと思われるものは考察対象例とする。

#### 3.1.2 属性と「形容詞的」

本稿では「属性(状態)」、「形容詞的」といった言い方の意味概念を以下のように捉える。

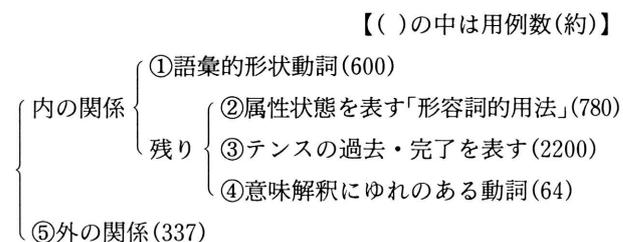
金水(1994)、稲垣(1998)を基に、「意志的動作主の存在が意識されないある動きを背景にした変化結果の状態を表し、時間性から離れて非時制的」という意味で「形容詞的」という用語を用い、「時間性から離れた、意志的動作主の存在が意識されないある動きを背景にした変化結果の状態」

を一時的状態とし、被修飾名詞の「属性(状態)」とする。ここで「ある動きを背景にした」とあるが、「曲がった道」のように、その動きは実際にあっても、なくてもよいのであり、それを決めるのは文脈や一般的知識によると捉える。ただ、現実世界においては、「干した魚」「汚れた服」のように、動作・変化があつての結果状態が属性状態となる場合がほとんどである。

### 3.2 データ収集

本研究はCD-ROM版『新潮文庫の100冊』の中の日本人作家による戦後に書かれた作品30編から用例を採集<sup>8)</sup>した。連体節「動詞＋た」が含まれる文14417例を抽出したが、今回そのうちの約4000例を分類対象とした。その内訳は以下の通りである。本稿では主に②を考察する。

図1 連体節「動詞＋た」の意味用法による分類



## 4. 形容詞的に解釈される連体節「動詞＋た」の分析

### 4.1 形容詞的解釈の可能な動詞の特徴

影山(1996)、稲垣(1998)は連体節において形容詞的意味を持つ動詞は意味構造に「結果状態」がなければならないと指摘している。以下、形容詞的に解釈できる用例を「動詞句＋被修飾名詞」という形で一部提示する。先行研究を参考にだまかに「主体動作・客体変化動詞」「主体動作・主体変化動詞」「主体変化動詞」に三分類した。

なお、今回以下の数の形容詞的用法の「動詞＋た」形連体節が含まれる文を分類抽出できた。

形容詞的用法の「動詞＋た」形連体節が含まれる文	分類抽出した文数
再帰動詞「た」形連体節文	319例 <sup>10)</sup>

7 寺村も認めているように、「内の関係」「外の関係」の両者はまったく性質の違うものとは必ずしも言えない。修飾部の述語と被修飾名詞が「デ」という関係にある時など現実にもどちらも認定しがたい場合がある。

8 用例採集にあたって、まずCD-ROM収録状態の『新潮文庫の100冊』をテキストファイル化した。次に検索抽出する際に文単位で抽出できるように、テキストファイル化した作品を一冊一冊ごとにフリーソフト jgrep で改行修正した。改行修正した全30冊作品をフリーソフト TeraPad で「た」「いだ」「んだ」を検索語として検索し、抽出された用例を見て、連体節に【動詞＋「た」】が含まれる文(個々に判断して、場合によって句、段落)を採集した。

9 所謂「再帰動詞」である。変化結果に注目すれば、この類を主体変化動詞に入れるべきであるが、文末用法は主体変化動詞と違った様相を呈するので、主体変化動詞とは別に一類として取り立てた。

10 対象文を順に沿って意味分類していく中で、再帰動詞が最初に出た時、当該動詞を検索語として「動詞＋た」形の連体節全文対象を検索して得た例数で、異なり語数は36語あった。

再帰動詞以外の他動詞「た」形連体節文	218例
自動詞「た」形連体節文	916例
慣用句の述語の動詞「た」形連体節文	107例

#### 4.1.1 主体動作・客体変化動詞

籐や蔓で作った梯子 時間をかけて練り上げた計画  
 オオバコを煎じた汁 ミツバの根を刻んで入れた舐味噌  
 果物を詰めた紙袋 写真を載せた記事 戒名をかいた綴じ帳  
水をいれた洗面器 胸元に結んだりボン穴をあけた甲板  
 各種のマークをはずした白服 といだ米  
あぶった干魚 沸かしたミルク 冷やしたスイカ  
 旗をたてた車 なめした皮 鉄片をまぜたセメント  
溶かしたミルク 折り畳んだ帆 ゆでた野菜

この類は文字通り、主体が客体に働きかけた結果、客体に変化するという意味を持つものである。この類の動詞の述定用法を見てみると、「た」形が完了を表し、「ている」形が動作の進行状態を表している。「てある」形が動作完了のあと、客体に生じた結果状態を表していると言える。

#### 4.1.2 主体動作・主体変化動詞

左胸に勲章を飾った山本 担架を提げた神父 頭を垂れた眷属友人  
 目元を染めた女子高校生 ズボンをはいた学生  
 脚絆をつけた外科医 無精髭をはやした主人  
 子供を背負った小母 笠をかぶった武士 スニーカーを突っかけた少年  
 髪を肩に垂らした彼女 帯をしめた少女  
 赤褌をかけた田舎娘 ドテラを着込んだ男  
 野良着をまとった男 子供をおぶった男 荷物を抱えた人  
 毒刃を持った男 タオルを首に巻いた会長

この類は主体が動作をし、それによって引き起こされた変化は主体自身が被るものである。この類の動詞の述定用法を見てみると、「た」形が完了を表し、「ている」形が動作の進行過程も、結果状態も表しうる。この類の動詞は「ている」形では普通結果状態の継続を表す<sup>11</sup>が、それだけでは意味が確定できない場合も多く、具体的な文脈、文の中の補語によって意味が決まってくる。

#### 4.1.3 主体変化動詞

晴れた日 よどんだ空気 痩せ細った彼女 傾いた縁側  
崩壊した画像 焼けた砂 よごれた食器 腐った玉ねぎ  
融けたガラス 口のひらいた摺鉢 にごった

海 壊れかかった蜂の巣 乾いた紙 むれた部屋 しめった砂  
濡れた海綿 砕けた岩石 色の変った手 ぐれた仲間  
融けたバター しめった麦落雁 ただれた皮膚  
傷ついたむかで かすれた声 割れたコップ 垢にまみれたシャツ  
薄らいた光 すり切れた俵 破れた障子 こわれたラジオ  
破れた窓ガラス 甘ったれた声 暮れなずんだ海浜 踵のつぶれた靴 脹らんだ肩  
冷めた茶 崩れた煉瓦 水洒れした冬川 切れた架線や電線  
 草の生えた洲 窪んだ眼 家紋のついたシャツ  
 表紙のとれかけた雑誌 盛装した女 潤んだ光  
萎えた細胞 (目にも)苛立った光 苔むした石灯籠  
とほけた犬 くすびた壁 立ち並んだ家 疲れた体  
脂切った肉 かじかんだ手 積った雪 穴のあいたスウェーター

この類の動詞は主体自身が変化する動詞である。述定用法を見てみると、「た」形が完了を表し、「ている」形が変化の結果状態の継続を表している。

以上挙げた動詞の共通の特徴は先行研究にすでに指摘されているような、意味構造に変化を持つという点である。その変化の後の結果状態に着目して捉えると、被修飾名詞の属性状態を表すことになり、連体節「動詞+た」形が形容詞的解釈を受けるのである。これらの動詞の指し示す変化には「水を入れた洗面器」のような位置変化を表すもの、「あぶった干魚」のような性質・状態の変化を表すもの、「材木で組んだ筏」のような作成（「無」から「有」への変化）を表すものなどいろいろなパターンがある。また、変化の進行段階を見ると「破れかけたサンダル、壊れかかった蜂の巣」のような変化の途中にある状態を表すもの、「疲れ果てた海軍、寝れきった町」のような変化がこれ以上できなく、尽きた状態を表すものなど様々である。

これまでは連体節において「動詞+た」形が形容詞的解釈の可能な動詞を見てきた。「打つ、蹴る、触れる、歩く、読む」などの主体動作動詞は意味構造に変化が含まれないので、この形容詞的用法を持たない。

#### 4.2 形容詞的解釈に関する連体節内の諸構文要素

この節では形容詞的解釈の可能な「動詞+た」形連体節を分析対象にし、どのような成分がこの種の解釈と共存でき、あるいはこの種の解釈を強化できるか、逆にどのような成分が形容詞的解釈を阻害し不可能にするかを観察してみる。具体的には主語（有情物・非情物）の有無の影響、（結果、程度、様態）の修飾語の関与、材料、原因、場所、目的句などの構文的要素を見ていく。

11 これに関して、寺村（1984）では普段よく目にする状態であることを理由に挙げている。

## 4.2.1 主語の有無との関わりと出来事の不明瞭性

寺村(1984:199)は、「白っぽい着物を着ている婦人…」は「白っぽい着物を着た婦人…」となるが、「その婦人が着ている着物…」は「その婦人が着た着物…」とならないという例を挙げて、主語が連体節に現れると、連体節動詞が形容詞的に解釈しにくくなると述べている。金水(1994)も寺村に同調している。確かに寺村(1984)で挙げられている例を見る限りそう言える。しかし、実際に例文を探してみると、以下に示しているように「の」で表されてはいるが、主語が連体節の文面に現れていて、しかも連体節「動詞+た」形が形容詞的に解釈できる例が数多く使われている。ただし、今回見つけた例はほとんど非情物主語である。これらの非情物主語は文面に表れても、連体節動詞の形容詞的解釈を妨げることなく、むしろ現れることによって、連体節全体で被修飾名詞の属性・状態をよりよく指し示すことになる。中には主語は必須成分で、現れないと「車輪のついた寝椅子 → \*ついた寝椅子」、「写真の入った封筒 → \*入った封筒」のように、意味が不明瞭で、連体節として成立しないものが多い。見つけた例を観察する限りでは、主語が被修飾名詞の部分やその中の存在物に当たり、連体節動詞が主語の変化完了後の状態を表すことによって、連体節全体で被修飾名詞の性質・形状を表す場合が多い。例えば例(6)を取り上げてみると、「樹皮が幹の一部分で、その樹皮がはげている状態にあることを示すことによって、幹は表面に樹皮がついていない状態にあることを示している」という具合である。

典型的な動作動詞は動作・変化などの出来事を表すとき、動作主や動作対象を何らかの形で明らかにしなければならない場合が多い。それに対し、形容詞的に解釈される連体節「動詞+た」形は動的出来事の展開過程を表すのではなく、動作・変化後の結果状態を表している。その結果状態にハイライトが当てられることによって、被修飾名詞の属性・状態を表すようになる。例えば例(7)の「窓硝子の破れ落ちた廃屋」は「いつ窓硝子が破れ落ちたかを表すのではなく、現に窓硝子がない状態を表し、それが廃屋の(一部分である窓の)属性状態になっている」。この例では具体的な時間が示されていないものの、「窓硝子が破れ落ちる」という出来事が過去に起ったことは事実である。しかし、例(9)「胴のくびれたタイプ」になると、通常成長するにつれ、このような体型になったと捉えられるが、極端に言えば、生まれつきの体型と捉えられなくもない。つまり、この例では過去の出来事存在さえ定かではない。この例はまさに金水(1994)で述べられているように、「過去の出来事存在しても存在しなくてもいい」ことを支持する例

である。

- (6)『野火』(1266)：樹皮のはげた幹の下面には苔がついていた。
- (7)『金閣寺』(2140)：唐手部や卓球部の、ほとんど窓硝子の破れ落ちた廃屋の部室が、この裏庭に面していた。
- (8)『死者の奢り・飼育』(1059)：手で動かすことのできる大きい車輪のついた寝椅子を近づけて来た少年の一人が学生にいった。
- (9)『雁の寺・越前竹人形』(104)：32だが、小柄で、ぼちゃっとしており、胴のくびれた男好きのするタイプで、かなり美貌であった。
- (10)『パニック・裸の王様』(1515)：そういわれて合田が書類入れのなかからおもむろに『カメラ・アイ』と週刊誌をとりだすのを見て私は席をたち、自室にもどると、ひきだしからリハーサルの写真の入った封筒をもちだして会議室にひきかえした。

上の例の連体節に現れる主語はいずれも意志性のない非情物である。ただし、有情物主語が全く現れないかという点、そうは言い切れない。実際、今回集めた資料の中に、「山本の乗った船」のような有情物主語の例がいくつかあった。この「乗る」という動詞は意志的主体の位置・姿勢<sup>12</sup>変化を意味する主体変化動詞であるので、必然的に意志的主語が要求されるものである。次の例(11)(a)の「新長官の乗った内火艇」の意味するところは、乗るという動作が実現されたあと、新長官が内火艇にいる状態で、その状態が内火艇の属性と解釈される。実例に基づいて見ると、士官たちが待っているのは普通の兵士が乗っているなどほかの内火艇ではなく、新長官が乗っているという属性をもつ内火艇である。

- (11) (a)『山本五十六』(368)：福留繁艦長以下「長門」乗組の士官たちが居並んで、新長官の乗った内火艇が近づいて来るのを待っていた。
- (b) さすがピカソの描いた絵で、表現技法がうまい。

この項でこれまで、形容詞的用法を持つ「動詞+た」形連体節内に主語が現れる例を見てきた。これら無情物主語が現れる「動詞+た」形連体節の背景化された出来事は誰によってなされたのかははっきりしていない。「写真の入った封筒」では実際誰が写真を封筒に入れたかはこれらの例文だけでは特定できない。文の意味を考えれば、ただ「封筒に写真が入っている」状態を表しているだけで、その背景にある動作が誰によってなされたかには無関心である。背景化された出来事の施し手ははっきりしない、特定できな

12 この例では位置変化の方が優勢であろう。「机に乗って話す」となると、姿勢変化の意味が濃厚になるのであろう。

いということ、何も無情物主語が連体節内に現れる文だけに限ったことではなく、主語が連体節内に現れていない文であっても、形容詞的解釈が可能であれば、その背景にある出来事の施し手ははっきりしないことが多いようである。次の例(12)～(14)に即して言えば、だれが「築いた、煮た、のせた」のかははっきり示されていない。特に例(13)の「煮たキャベツ」では、不特定のある過去の時に煮たことを述べているのではなく、「生のキャベツ」と対極的に捉えている一般概念と理解したほうが妥当であろう。例(14)も不特定のある過去の時に載せたことを述べているのではない。例(14)について、具体的な文脈なしでは、「豆腐の上のにせたコンニャク」は動作が行われたこととその後の結果状態の継続と捉えられるが、形容詞的解釈はできないと思われる。しかし、この文において「空気の入っていない風船、タマの入っていない銃」と対等的に使われている文脈なので、コンニャクの属性状態を表していると捉えられる。

- (12)『野火』(1202)：土間には土を築いた簡単な竈があり、二つ三つこわれた土器が倒れていた。
- (13)『太郎物語』(10781)：しかし、考えてみれば油揚げと煮たキャベツと、バターを入れて蒸し煮にしたキャベツとは、日本料理と西洋料理の差はあっても、同じことを狙ったのである。
- (14)『二十歳の原点』(4550)：けれども闘争のない生活は、空気の入っていない風船、タマの入っていない銃、豆腐の上のにせたコンニャク、…ではないでしょうか。

4.2.1節では、形容詞的用法を持つ「動詞＋た」形連体節について、連体節内の主語の有無と出来事の不明瞭性について見てきた。次節では、形容詞的に解釈される「動詞＋た」形連体節内の副詞の現れ具合、副詞と形容詞的解釈との関わりについて観察してみる。

#### 4.2.2 副詞的修飾語との関わり

高橋(1994)、揚妻(1994)、金水(1994)は連体節「動詞＋た」が形容詞的解釈をうけるには副詞が影響を与えると指摘している。具体的に言えば、結果副詞は結果状態の焦点化を強化するので、形容詞的解釈を阻害しない。それに対して、様態の修飾語は背景化される動作・変化を修飾し、その動作・変化様態を強調し、具現化する働きをするので、連体節「動詞＋た」の形容詞的解釈を阻害するということである。

#### 4.2.2.1 結果状態の修飾語<sup>13</sup>との関わり

結果状態の修飾語について、仁田(1997)は「動きが実現した結果の主体や対象の情態の有様に言及することによって、動きの実現のされ方を示す副詞的修飾成分を結果の副詞と仮称しておく」と記述している。また、仁田(1997)では、結果の副詞を取る他動詞は主体の働きかけが対象の状態を変化させる動詞で、特に典型的なものが<様変え>の対象変化他動詞であり、結果の副詞を取る自動詞は主体の状態変化を表す動詞で、特に典型的なものが<様変わり>の自動詞であると指摘している。仁田(1997)は文中における機能によって、副詞を定義分類している。本稿は仁田(1997)の結果の副詞を結果状態の修飾語と名付けて見ていく。

実際に収集した形容詞的用法の「動詞＋た」の用例を見ると、結果状態の修飾語がよく使われていると言える。

- (15)『砂の女』(1567)：そう思っただけで、皮膚がげばだち、ばりばり乾いた糊をはがすような音をたてはじめ。
- (16)『砂の女』(1544)：こちらがまぶしくなるほど、赤く充血した眼だ。
- (17)『砂の女』(1809)：手首もすでに、赤黒くむくみを帯びて、篋のようにつぶれた爪も、古いインクのしみのような色に変わっていた。
- (18)『あすなろ物語』(1626)：毎朝のように二人は暗いうちに釣竿を持って宿を出、暗くなってから、くたくたに疲れた躰をひきずって、宿へ帰って来た。
- (19)『孤高の人』(10214)：…とひとこというと、かえす眼で加藤のカンカン帽子から背広服姿をじろりと眺めおろして、ピカピカに磨いた靴先に止めた。
- (20)『点と線』(1524)：まるまると肥えた楮ら顔の駅長が、机の向うからきいた。
- (21)『砂の女』(1002)：遠からず、女をさいなむ刑吏になりはてた自分の姿が、まだらに砂をまぶした女の尻の上に、映し出されるような気がしたのだ。
- (22)『金閣寺』(1340)：更に母は古い鼠いろの真綿に幾重にも包んだ父の位牌をとり出して、私の本棚の上に置いた。
- (23)『砂の女』(3032)：広く、扇形にひらいた砂の起伏のかなめのあたりに、瓦屋根や、トタン屋根や、板葺きの屋根が黒く群がり…。
- (24)『金閣寺』(2661)：彼はズボンの裾をたくしあげて、薄黄に染まった脛を見せた。
- (25)『パニック・裸の王様』(4197)：城壁から見晴らしても眼に映るのはただ広大な高梁畑と、黄色くかすんだ地平線だけである。

13 用例の中には、動詞を修飾する成分として副詞、形容詞の連用形、比喩表現など数多くあるが、本稿では一括して修飾語と呼んでおく。

上記した例を見て分かるように、これらの結果状態の修飾語は連体節動詞の表す変化の結果状態を修飾し、それを具体的に指し示している。したがって、機能的には連体節「動詞＋た」の形容詞的用法を強化していると言える。上記した例の中には「疲れた躰、肥えた駅長、真綿に包んだ位牌」のように、結果状態の修飾語がなくても結果状態を表し、形容詞的に解釈されうるものもある。一方、「薄黄に染まった脛⇒薄黄の脛」「扇形にひらいた砂の起伏⇒扇形の砂の起伏」のように、動詞を取っても意味がさほど変わらないが、結果状態の修飾語をとって「染まった脛、磨いた靴先、ひらいた砂の起伏」となるとやや具体性にかけるものもある。後者の現象から、実際に被修飾名詞の属性・状態を指し示しているのは動詞というよりも結果状態の修飾語のほうであり、結果状態の修飾語が被修飾名詞の属性・状態に強く関わっていると言える。

要するに、「薄黄に染まった脛」と「真綿に幾重にも包んだ位牌」などの例における結果状態の修飾語の省略可能な度合から、連体節「動詞＋た」の形容詞的解釈に結果状態の修飾語の果たす役割に軽重があることが分かる<sup>14</sup>。結果状態の修飾語は連体節「動詞＋た」の形容詞的解釈に果たす役割が小さければ現れなくてもいいが、その役割が大きいかほど欠かせない成分になり、その分動詞の存在意義が意識されなくなると言える。

今回集めた資料の中に、上に挙げた例のほかに、結果状態の修飾語が使われている例はまだ数多くある。その一部を提示するととどめたい。これらの結果状態の修飾語は変化の結果状態を具体的に指し示しているが、以下の例から分かるように、その変化結果の内容は「厚さ、高さ、長さ、広さ、形、色」など様々である。

厚くたまった落葉 丸くすりへった刃の先 白くふやけた膜 赤肌に剥けた肩 斜めに傾いた棒 竜骨のように反り返った屋根 がっしり緊まった肉塊 目をぱっちりひらいた死人 低く押し殺した笑い 酸っぱく腐った雑巾 低く垂れ下がった雲 しんと静まった寝室 つややかに禿げ上がった額 褐色に皮膚の焼けた体 長く連結した電車 黒くやけただれた腹 浅黒く日に焼けた顔 赤く(黄色く、黄褐色に)濁った眼 滑らかに湿った舌 船台一杯にひろがった船体 かさかさに乾いた脣 かちかちに固まった膿

この項で結果状態の修飾語と連体節「動詞＋た」の意味解釈との関わりを見てきた。次の項では程度の修飾語と連

体節「動詞＋た」の関わりを見てみる。

#### 4.2.2.2 程度の修飾語との関わり

次に、程度の修飾語について見る。下記の例に示されているように、程度の修飾語も形容詞的に解釈される連体節によく現れる。動詞より、形容詞や形容動詞をよく修飾する程度の修飾語が連体節によく現れることは、連体節「動詞＋た」形が形容詞的用法を示していることの裏付けになるであろう。これらの程度の修飾語は「動詞＋た」を修飾することによって、連体節全体で被修飾名詞の属性状態を細かく指定し、描写していると言える。今回収集した用例を見るかぎりでは、この程度の修飾語と共起する連体節の動詞はすべて主体変化動詞である。しかも、程度の修飾語は連体節動詞の指し示す「結果状態」を修飾し、結果状態の程度を表していると言える<sup>15</sup>。

- (26)『塩狩峠』(3569)：少し疲れた顔をしているようだが、体をこわしてはいけないうよ。
- (27)『国盗り物語』(22088)：…深芳野はひどく乾いた瞳で、しかも一度もまたたきせずに見送った。
- (28)『孤高の人』(13916)：加藤は、熱い飯を腹いっぱいつめこむと、すっかり乾いた衣服を身につけて、浜坂へ下っていった。
- (29)『パニック・裸の王様』(4049)：赤ら顔のでっぶり肥った、頭の禿げた小男であった。
- (30)『太郎物語』(10680)：トマトだって、ちゃんと熟れた生のトマトだしね
- (31)『沈黙』(1756)：有難いことにはまだ小さい火種も残っていたので、しとどに濡れた野良着をゆっくりと干しました。
- (32)『砂の上の植物群』(182)：異常なまでに肥った女で、膨れ上がったというのがふさわしい軀に似合わず、身軽に動きまわっていた。
- (33)『風に吹かれて』(1987)：あの乾いた大気の中、見上げると吸い込まれて行きそうなほど見事に澄んだ秋空の青さとか、赤茶けた低い丘状の山肌とか、冬の凍結した河面を渡る牛車の音だとか、…。
- (34)『パニック・裸の王様』(1096)：彼は酒の溝に寝ていたのかと怪しみたくなるばかりに酔いしびれた俊介をものもいわずに自動車へおしこみ、運転手に全速力を命じた。
- (35)『忍ぶ川』(1136)：まひるのようにあかるんだ雪の野道を、馬櫓が黒い影をひきずってりんりんと通った。

14 揚妻(1994)にも同様な指摘がある。

15 佐野(1998)では、主体変化動詞と共起するとき、「だいぶ、かなり、少し、ちょっと」類は「変化の度合い」と「結果状態の程度」を表しうるが、「非常に、とても、はなはだ、たいへん、極めて」類は「結果状態の程度」しか表しえないと指摘されている。今回見つけた用例には「変化の度合い」を示すものはなかったと思われる。「変化の度合い」を表せば、変化結果の状態より変化過程が顕在化されるので、結果状態の焦点化による形容詞的用法の連体節に現れないことも理解しがたくない。

資料の中には、上掲した例のほかに、まだ多くの使用例がある。ここで一部挙げる。

ちよつとひらけた場所 深く埋もれた石 よく茂った竹藪 よく育った芝生 太陽の光を十分に吸い込んだ牧草 かなり余裕を持った食料 満々と水を湛えたクリーク 深くくびれた入江 かなり盛り上がったへそ 少しくぼんだ目 最も活気にあふれた時期 たっぷり味付けたワルツ かなり目立った人事異動 芸術的に寸分のすきもない整った短編 ほてるほど日に焼けた肌 よく焼けたパン やや薄汚れたアノラック 十分にしめった下着 雲ひとつなく晴れた空 豚みたいに太った女 体の輪郭が融けてはみ出したように太った女 融けかけたバターのかたまりのように肥った体 蟻螂のように痩せた腕 砂のように乾いた音 きりぎりすのように痩せこけた若者 魚のはらわたのように脂のにじんだ寝床

#### 4.2.2.3 様態の修飾語との関わり

次に連体節内に現れた様態の修飾語について見てみる。金水（1994）は動作の様態を描写する修飾語が形容詞的解釈を阻止すると指摘した上で、動作の様態や方法を示すものでも、結果の状態と緊密な関係を持っていれば、形容詞的解釈が可能であると付け加えている。収集した例文には、以下のようなものがあつた。どれも連体節全体で被修飾名詞の属性状態・内容に関わっていると言える。しかも、その属性状態・内容は連体節で表されている出来事によつてもたらされたものである。例えば「タツプリしょうゆをつけて焼いた」せんべいは「しょうゆをつけずに、あるいは少しつけて焼いた」せんべいより醤油成分が多く含まれるという属性を持っている。

- (36) 『パニック・裸の王様』（1551）：厚いのりを巻き、タツプリしょうゆをつけて焼いたせんべいが食べたというのであつた。
- (37) 『砂の女』（2832）：だが、なにも、時間をかけてねり上げた計画だけが、首尾よく成功するとはかぎらない。
- (38) 『金閣寺』（1413）：国民服に脚絆をつけた外科医は、この出来物にフルンケルという簡単な名を与え、アルコールを借しんで、火であぶって消毒したメスをあてがつた。
- (39) 『砂の上の植物群』（2315）：それはB女の肩のあたりから立上ってくるのか、あるいはその下に在るA女の胸から発するものか判別ができなかったが、太陽の光を十分に吸い込んだ牧草の匂いである。

(40) 『一瞬の夏』（13279）：内藤は炭火で焼いた肉と野菜をしっかりと食べながら、自分は大丈夫だから心配しないでほしいと何度も繰り返した。

(41) 『孤高の人』（11028）：加藤は、緑色の絹糸でていねいに縁取りしたそのハンカチに眼をやつた。

例（41）の「ていねいに」は結果状態の修飾語だと思われるかもしれないが、ここでは丁寧な縁取りをしなければ、きちんとした縁取りを持ったハンカチが有り得ないと考え、「ていねいに」を結果状態に強く関わる様態の修飾語と見る。また、言い換えれば、様態の修飾語と結果状態の修飾語を兼ねていると思われる。

次の例(42)(43)(44)になると、点線部分は動作様態を表すと同時に、被修飾名詞の構成材料も表しており、意味的には後で述べる材料を示す「で」に近寄っていると言える。

(42) 『黒い雨』（1268）：膳の上のお料理は、ミツバの根を刻んで入れた舐味噌と、卵焼と、沢庵と、それから鱈の浮いている味噌汁である。

(43) 『国盗り物語』（12524）：銚子は、青竹を切つて作った素朴な筒であり、さかずきは、陶壺である。

(44) 『死者の奢り・飼育』（1660）：厚い板の朽ちはじめている床に筵と毛布を敷いて父が横たわり、養蚕用の木枠に板戸を重ねて作った寝台に僕と弟が寝ると、…。

#### 4.2.3 形容詞的解釈が可能な文におけるほかの成分

##### 4.2.3.1 材料方法を表す「で」

今回収集した連体節「動詞＋た」が形容詞的用法を表す例文の中には、材料・方法を表すものが幾つかあつた。これら材料・方法を表す成分は動作の展開過程に関わり、出来事を具体化している。出来事を具現化することは、一旦結果状態の焦点化による形容詞的解釈を阻害するように見える。しかし、これら材料・方法を表す成分は動詞を修飾する成分として機能するよりも、被修飾名詞の属性に強く関わっていると言える。(手段方法を表す成分はこの検証方法では取れないが)結果状態の修飾語を見たときに採つた方法(動詞を省いてみる)で材料を示す成分を見てみると、「泥と木とでねりあわせた小屋⇒泥と木の小屋」「澱粉で作った餛⇒澱粉の餛、澱粉餛」のように、やや不自然な文になるものの、意味から見れば「小屋、餛」の素材・材料を明記しているのが、被修飾名詞の属性を表していると言える。しかし、今度反対に材料を表す成分を取ると、「ねりあわせた小屋」「したためた礼状」のように、意味が不明瞭で具体性に欠けたものになる。このことから、動詞よりもむしろこれらの修飾成分のほうが情報価値として重要であると言える。

(45) 『沈黙』（1636）：泥と木とでねりあわせた小屋。

- (46) 『黒い雨』(1460)：これは古市の奥の農家の人が、彼岸花の根を水で晒してその澱粉でつくった飴を、同僚の人がその農家の人から買って来て矢須子さんに取次いでくれるものでした。
- (47) 『山本五十六』(10540)：…という墨でしたためた礼状をもらった。
- (48) 『戦艦武蔵』(2323)：そこで、そうした事故が起きた場合のことも予想して、船体の損傷を最小限度に抑えるため、対岸に大きな材木で組んだ筏を浮べて、その衝撃をやわらげる方法も採用した。
- (49) 『あすなろ物語』(3272)：20坪程の前庭を持ち、生垣で屋敷を囲んだ中流級の文化住宅であった。
- (50) 『黒い雨』(2150)：支店長の厚意で、炊きたての御飯でつくった握飯と沢庵漬と佃煮を三人ぶん頂いた。

次の例(51)(52)もいつ、どこで、誰によって使われたかを表しているのではなく、単なる「砂糖、少年スター」は「京菓子、ポスター」の材料・素材になっていることを表している。したがって、連体節全体で被修飾名詞の属性を限定していると言える。

- (51) 『国盗り物語』(10701)：なにしろ、砂糖のめずらしいところで、砂糖をつかった京菓子などはこの美濃の山里では宝石のようなものだ。
- (52) 『パニック・裸の王様』(1952)：…京子のポスターを進行させるかたわらひそかに少年スターを使ったポスターも準備することをおこたらなかった。

#### 4.2.3.2 状態や事柄の特定を表す「に」<sup>16</sup>

この状態や事柄を特定する「に」が使われている例も数多くあった。下の例の中から「N+に」を省いて、「よごれた空気」「ぬれた首」「焼けた顔」のようにしても意味がさほど変わることはない。ただ、「N+に」は出来事を具体化する働き<sup>17</sup>もするので、付け加えることによって背景化された出来事が若干強化されることはあるが、その働きより被修飾名詞の属性状態を限定し、具体化する働きのほうが強いと言える。あるいはここで出来事を具体化することを一つの経路として、最終的に結果状態に帰着し、被修飾名詞の属性状態に強く関わってくると言ったほうがいいかもしれない。例えば「スモッグによごれた空気」は「いつ、なぜ」汚れたかといった特定の出来事を意味するのではなく、「スモッグに汚れたことによって生じた汚染されている状態の空気」を意味し、「スモッグに」を付け加えることによって例えば「化学毒気に汚れた空気」と区別して空気の汚染

状態を細かく限定しているようにも取れる。

- (53) 『ブンとブン』(5012)：東京都を出る際に、かならず、一立方メートル以上の容量のある袋に、スモッグによごれた空気をつめこまなければならないという法律である。
- (54) 『沈黙』(1627)：最初の丘の頂まで露にぬれた泥で足をよごしながら、段々畠を登りつづける。
- (55) 『沈黙』(1686)：空は地面にのこっている水溜りにその碧色と白い小さな雲とをうつす。私はしゃがみ、汗にぬれた首をぬらすためにその白い雲を手でかきまわす。
- (56) 『金閣寺』(1329)：母は日に焼けた顔に、小さな狡そうな落ち窪んだ目を持っていた。

#### 4.2.4 形容詞的解釈を阻害する成分

この節では形容詞的解釈を阻害する成分を見る。まず原因を表す「で」格を見てみる。

原因の「で」は出来事を具体化、特定化する働きをするものである。次の例を見れば分かるように、もともと形容詞的に解釈できる連体節にはこの原因を表す「で」が使われると、属性状態を表さなくなり、動詞の表す変化過程とその結果状態を表すようになる。原因の「で」と共起する連体節「動詞+た」は、その状態性に注目すれば変化後の結果状態を、その変化に注目すれば変化完了というテンスの意味を表すことになる。つまり、原因の「で」が現れることによって、連体節「動詞+た」は意味解釈に揺れが生じるのである。この原因の「で」は上の節で扱った状態や事柄の特定を表す「に」より出来事を具現化する力がずっと強いと思われる。具体的に言えば、この「で」格は動詞に強く関るが、被修飾名詞の属性状態にほとんど関らないと言えるのであろう。

- (57) 『沈黙』(3793)：神経の疲労で黄色く濁った眼に、外光はことのほか痛い。
- (58) 『国盗り物語』(11081)：政頼は、美食で肥った体をわざとよろけさせてみせた。
- (59) 『砂の女』(1309)：砂と汗でふやけた皮膚は、もう炎症をおこす一歩手前だった。
- (60) 『死者の奢り・飼育』(1098)：シーツを掛けてくれ、と屈辱で囁いた声で学生はいった。
- (61) 『国盗り物語』(11738)：庄九郎は土間で足をすずぎ、旅塵で汚れた衣装をぬぎすて…。

形容詞的解釈を阻む成分は原因を表す「で」だけではな

16 この「に」の「状態や事柄の特定を表す」用法は寺村(1992, p.224)によるものである。

17 助詞「に」には「チョムランマの高さに驚いた」のように、原因を表す用法があることから、筆者はこの「に」にも若干結果状態をもたらした「原因」の要素が入っていると理解し、そのため出来事をやや具体化していると考えた。

い。次の例(62)～(66)を見れば分かるように、明確な動作主や特定の時間、場所、原因、目的を示す成分、動作・変化の展開過程を修飾する「急に、だんだん、いよいよ、せつせと…」などの様態の修飾語が連体節に現れると、形容詞的解釈が困難になると言える。連体節「動詞＋た」形は例(62) aのようにテンスの過去を表したり、例(63) aと(64) aのようにテンスの完了の意味をやや感じさせながら、結果状態を表したりする。ただ、例(62)の時間、場所表現、(63)の動作主を取り除いても形容詞的解釈は成り立たない。それどころか、意味が不明瞭で、不完全な文になってしまう。それに対し、(64)は原因句を取り除くと、形容詞的解釈が可能になる。では、動詞だけ残した場合の(62)、(63)と(64)の意味の違いはどこから来たかという点、それは動詞の性質の違いによるものである。(62)の連体節動詞は動作動詞で、変化(の結果状態)がないため、形容詞的解釈は不可能である。(63)と(64)の連体節動詞はともに変化動詞で、その「た」形は変化の結果状態を表すが、(63)の変化の結果状態(占領されている状態)は普通島の属性とは解釈しにくいのに対し、(64)の変化の結果状態(乾きかけている)は苔の属性状態と捉えられるので、形容詞的解釈が可能である。

(62) a 『風に吹かれて』(1313)：数分前にカブリツキで見たラインダンスが、感動的であればあっただけ、彼のショックも大きかったのであろう。

? b 見たラインダンスが、感動的であればあっただけ、彼のショックも大きかったのであろう。

(63) a 『黒い雨』(151)：米軍の占領したサイパン島かどこかの島で、日本人が食糧を十分に貰って楽しく暮しているという記事が書いてあったそうだ。

? b 占領したサイパン島かどこかの島で、日本人が食糧を十分に貰って楽しく暮しているという記事が書いてあったそうだ。

(64) a 『風に吹かれて』(1642)：連日の晴天で乾きかけた樹陰の苔も、しっかりと生氣を取りもどしているように見える。

b 乾きかけた樹陰の苔も、しっかりと生氣を取りもどしているように見える。

(65) 【作例】：(1ヶ月見ない間に)急に太った知人、野原で練り合わせた小屋、ガラガラと崩れた塀、ゆっくりと固まったセメント「仁田(1997:255)の例」

(66) 【作例】：冬のとき食べるために、私が先週屋上で干した魚は半分猫に食べられた。

では、なぜ明確な動作主や特定の時間、場所、原因、目的を示す成分が現れると形容詞的解釈が不可能になるかという点、それはこれらの成分の示すものと形容詞的解釈を

受ける際の条件が矛盾するからである。具体的に言えば、これらの成分はいずれも動作・変化の示す出来事を具体的に描写するもので、事柄を特定する働きをしていると言える。この出来事を具現化する働きは出来事の背景化、結果状態の焦点化という認知による形容詞的解釈を阻害するのである。それで、これらの事柄を特定する成分が現れると、形容詞的解釈が不可能になり、テンスの過去・完了あるいはアスペクトの結果状態を表すようになる。言い方を変えれば、「動詞＋た」が形容詞的用法を示す連体節の文にはこれらの成分が現れないことが普通であり、逆に「動詞＋た」が過去・完了、結果状態を表すにはこれらの成分が必要になってくる。また、連体節における「動詞＋た」の意味解釈に動詞の表す動作か、変化かという意味特徴が強く関わっていることが分かる。

#### 4.4 まとめ

以上、事例に基づいて連体節「動詞＋た」の形容詞的解釈の可能性を観察、分析してきた。観察分析を通して明らかになったこと、確かめられたことをまとめると、以下のようになる。

I 形容詞的解釈の可能な動詞にはいろいろな種類があるが、これらの動詞の共通の特徴は意味構造に変化概念が内包され、何らかの意味で変化を表すという点である。これについて確認できた。

II 形容詞的解釈と共存できる要素、形容詞的解釈を強化する要素

① 「動詞＋た」形で形容詞的解釈の可能な連体節には主語が現れることが可能であるが、ほとんどの場合、それは無情物主語でなければならない。事例を観察してみると、「車輪のついた寝椅子」のように、連体節主語が被修飾名詞の部分であることが多い。

② 連体節内に結果状態の修飾語、程度の修飾語が現れることが可能で、結果状態の修飾語が現れることによって形容詞的解釈が強化される。程度の修飾語は連体節動詞を修飾限定することによって、被修飾名詞の属性状態を細かく描写していると言える。また、本来動作の様態を修飾限定する様態の修飾語が何らかの意味で被修飾名詞の属性状態に関わっていれば、連体節内に現れることによって、連体節「動詞＋た」の形容詞的解釈を可能にすることができる。

③ 材料・方法を示す「で」格は被修飾名詞の属性状態に関わっているので、連体節に現れることによって形容詞的解釈が可能になる。状態や事柄の特定を表す「に」格は最終的に被修飾名詞の属性状態に関わるので、形容詞的に解釈される連体節に現れることがある。

III 形容詞的解釈を阻害する要素

意志的動作主、時間副詞、動作・変化の発生原因を表す「で」格、出来事が起った場所を表す「で」格、変化の展開過程を表す成分「だんだん、急に、ゆっくりと」などは出来事を具現化する働きをするので、形容詞解釈を阻害する。

IV 連体節において「動詞＋た」で形容詞的用法を示す動詞は動詞としての性質を十分持っている。ただし、連体節というテンスから開放されうる特殊な位置で変化の結果の状態に焦点が絞られるという認知を経てはじめて、形容詞的解釈が可能になるわけである。

ここでは主に、連体節「動詞＋た」の形容詞的用法について見てきた。上の記述を見る限りでは、この「動詞＋た」の形容詞的用法はほかと截然と分けられる用法のような誤解を与えかねないので、一言付け加えておきたい。

連体節「動詞＋た」形はテンスの過去・完了を表す用法、被修飾名詞の属性状態を表す形容詞的用法があり、両者は連続性のあるものである。形容詞的解釈の前提であるアスペクトの結果状態を表す用法がその間に介在されている。この三者の間にも中間的なものが存在しており、実際いろいろな文脈や構文的条件によってその意味用法が決まることが多いが、逆にどちらかはっきりと決められない場合もある。本稿で連体節動詞「た」形の意味用法による分類をしているとき、「ゆれのある類」というグループを立てたのもそのためである。

4.2.4節で述べた原因の「で」が「動詞＋た」形連体節に現れるとき、テンスの過去・完了を表しているか、結果状態を表しているかはっきりせず、ゆれがあると述べた。

再掲：(59)『砂の女』(1309)：砂と汗でふやけた皮膚は、もう炎症をおこす一歩手前だった。

(59)ではその原因(砂と汗で)に重点を置けば、動詞の表す変化過程が顕在化し、連体節の「動詞＋た」はテンスの過去・完了を表す。しかし、話し手が眼前の皮膚の状態に視点を置けば、連体節の「動詞＋た」形はふやけたあとの結果状態(ふやけている)の意味になる。つまり、ここでは見る視点によって連体節「動詞＋た」形の意味解釈が違ってくる。主節の意味解釈を視野に入れてこの例(59)を見れば、後半部分「もう炎症を起こす一歩手前(の状態)だった」は、皮膚の状態を指し示す文であるので、この文の「ふやけた」はどちらかという、結果状態の継続という意味のほうが強いように思われる。しかし、そうだとっても、「砂と汗で」という出来事を具体化する成分があるので、連体節「動詞＋た」形が形容詞的に解釈することは不可能であろう。

このように、具体的な文脈の中に置いてみても、一つの

意味だけを表すものばかりでなく、二つ、あるいは三つの意味を表している場合がある。だが、二つ、三つの意味を表す場合でも、必ず一つの中心的な意味があるように考えられる。具体的にどの意味、あるいはどれとどれの意味を示すかは動詞の意味特徴、文脈、連体節の構文特徴によって決められる。

## 5. おわりに

本稿では連体節における「動詞＋た」が事物の属性・状態を表す形容詞的用法をめぐって、こういった構文的条件のもとで、形容詞的解釈が可能か、あるいは不可能かに焦点を絞って考察した。

ある事物の状態を見たとき、たとえその状態が明らかにある過去の出来事によってもたらした結果状態であっても、日本語母語話者は通常その過去の動作・変化をあまり意識せずに眼前にある結果状態に認知の焦点を当て、物事を記述する。これは、日本語母語話者にとって「はれた日」「腐った豆腐」のように、晴れているか曇っているか、腐っているか新鮮であるかという事物の状態が大事な意味を持っており、いつ、どのぐらいの時間をかけて、どのように「晴れた」「くさった」のかは余り重要な意味を持たない場合が多いからであろう。そして、このような状態を持った事物を表出するとき、日本語では連体節において「動詞＋た」形で事物の属性・状態を表す言語表現方法が用いられる。実際このような形容詞的表現は日本語の中で広く使われている。

今回小説から抽出した例文を観察し、分析してきた。これから現代版の小説、新聞、社説など多ジャンルの資料から用例を採集し、それをもとに形容詞的解釈を阻害する要素にはまだどのようなものがあるか、形容詞的に解釈される文の中に共存できる成分はまだどのようなものがあるかを詳しく分析していく所存である。また、連体節「動詞＋ている(てある)」形と「動詞＋た」の形を対照分析し、「ている(てある)」の使われている積極的な意味、また、どのような場合に「た」から「ている(てある)」への変換が不可能であるかを検討する必要がある。また、主に関係・存在を表す動詞に限った現象だが、連体節の「た」形と「る」形の交替可能なもので、その「た」形と「る」形に意味の違いがあるかどうか、あるならどのような違いで、どのような場合にその違いが見られるかも考察することが求められている。これらの点について今後研究していきたい。

## 参考文献

揚妻優子(1994)：「属性を表す動詞タ形の連体節の研究」『ことばの世界北海道方言研究会20周年記念論文集』小野米一(編)北海道方

言研究会叢書第5巻

- 稲垣顕子(1998)：「V(動詞)＋た」の連体節における形容詞的用法について、『日本語・日本文化研究』8号 大阪外国語大学日本語講座
- 影山太郎(1996)：『動詞意味論——言語と認知の接点』くろしお出版
- 金水 敏(1994)：『連体修飾の「タ」について』『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版
- 金水 敏(他)(2000)：『時の表現』『時・否定と取りたて』日本語の文法2 岩波書店
- 金田一春彦(編)(1976)：『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 佐野由紀子(1998)：『程度副詞と主体変化動詞との共起』『日本語科学』3 国立国語研究所
- 砂川有里子(1986)：『日本語文法セルフ・マスターシリーズ2する・した・している』くろしお出版
- 高橋太郎(1973)：『動詞の連体形「する」「した」についての一考察』『ことばの研究』4
- (1974)：『連体形のもつ統語的な機能と形態論的な性格の関係』『教育国語』39
- 以上2編は『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失』(1994)むぎ書房に所収
- 趙 海城(2005)『連体節における「V＋た」の形容詞的用法について——コーパスを利用した意味論的研究——』九州大学大学院比較社会文化学府修士論文
- 寺村秀夫(1984)：『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 仁田義雄(1997)：『日本語文法研究序説——日本語の記述文法を目指して』くろしお出版
- 町田 健(1989)：『日本語の時制とアスペクト』アルク株式会社
- 松村 明(1969)：『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 松村瑞子(1995)：『いわゆる～テイルの交替形としての～タ』『言語科学』30号九州大学言語文化学部言語研究会
- 森本順子(1994)：『日本語教育の立場からみた日本語研究と機械翻訳』『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版

## 用例出典

CD-ROM版 新潮文庫の100冊(1995) 新潮社版

阿川弘之/『山本五十六』；安部公房/『砂の女』；井上ひさし/『ブンとフン』；井上靖/『あすなろ物語』；井伏鱒二/『黒い雨』；遠藤周作/『沈黙』；塩野七生/『コンスタンティノープルの陥落』；開高健/『パニック・裸の王様』；吉行淳之介/『砂の上の植物群』；吉村昭/『戦艦武蔵』；宮本輝/『錦繡』；五木寛之/『風に吹かれて』；高野悦子/『二十歳の原点』；三浦綾子/『塩狩峠』；三浦哲郎/『忍ぶ川』；三島由紀夫/『金閣寺』；司馬遼太郎/『国盗り物語』；松本清張/『点と線』；新田次郎/『孤高の人』；水上勉/『雁の寺・越前竹人形』；星新一/『人民は弱し 官吏は強し』；石川淳/『焼跡のイエス・処女懐胎』；赤川次郎/『女社長に乾杯』；曾野綾子/『太郎物語』；倉橋由美子/『聖少女』；村上春樹/『世界の終わりハードボイルドワンダーランド』；太宰治/『人間失格』；大岡昇平/『野火』；大江健三郎/『死者の奢り・飼育』；沢木耕太郎/『一瞬の夏』

## 付 記

本稿は筆者の修士論文の一部に加筆修正したものである。修士論文及び本稿の執筆に際し、松村瑞子先生、因京子先生、板橋義三先生、山村ひろみ先生よりご指導いただいた。ここに謹んで感謝の意を表したい。